図1

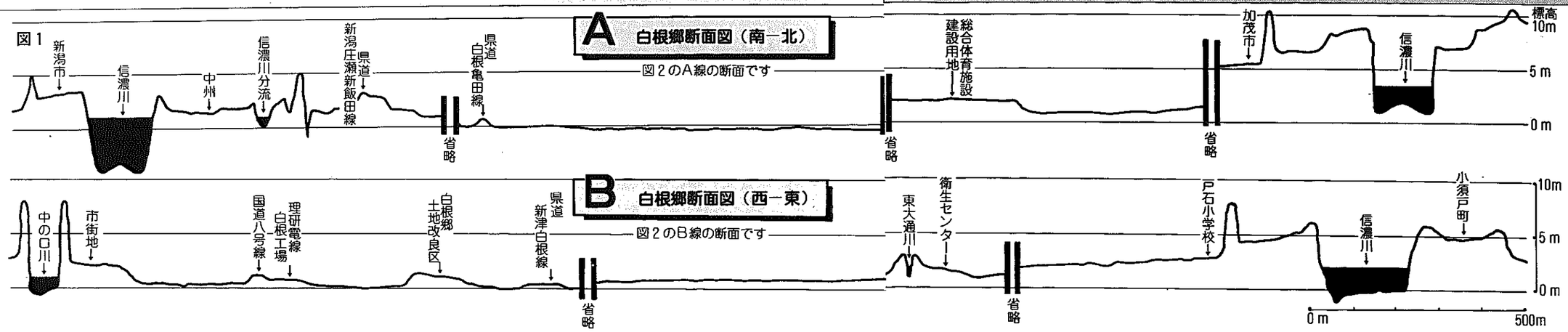
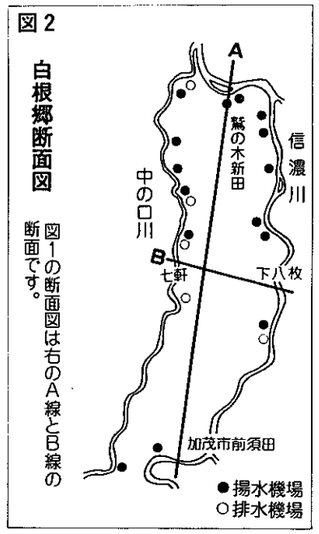


図2



五十三年の六・二六水害。必死の土のう積み作業（大郷橋付近）

水倉。2メートルくらい土盛りしたところに建てられた倉。市内各地に現存しています

42年の8・28水害。濁流が河川敷を走る。自然の猛威をまざまざと（大郷）

36年の8・5水害。濁流に洗われ、無残な道路と化した翌朝の旧冨月橋付近

堤防決壊による大水害は、明治十四年を最後に起きていません。

また、恒常的な水害を繰り返していた旭町周辺も都市下水路の整備により、浸水騒ぎを起こすこともなくなりました。

こうしたことから、市民のみなさんは、水に対する危機感をほとんど感じていないように思われます。

海より低い土地もある白根郷

次に、地形上から白根郷をながめてみましょう。日本一の総延長（三六七キロメートル）と流水量（一五六億トン）を誇る信濃川の沖積平野にあって、信濃川と中の口川に囲まれた中州（なかす）が私たちの住む白根郷です。

郷内の土地の一部は海面よりも低く、郷内十四か所の揚水機場から取り入れた水は、最終的に五か所の排水機場からポンプでくみ上げて、中の口川に流しています。

大河津資料館（分水町）を訪ねてみました。渡部武男館長は、「大河津分水ができて、今年でちょうど五十年。白根郷の歴史は、水との戦いの歴史だったと言っても過言ではないでしょうね。破堤と冠水の繰り返しだったのですよ」と、語ってくれました。

このようにして日ごろは飲料水や農業用水として大切な水源となっている川も、ひとたび水量を増すと、きばをむいて私たちの生活を脅かし

クローズ・アップ

もしも長崎のような雨が降ったら…

白根郷は大丈夫？

信濃川洪水絵巻（松本楓湖作・大河津資料館）

表1

最近の水害（昭和）

33年7月24日	三十七戸が浸水
33年7月26日	三百四十戸が浸水
34年7月22日	八戸が浸水
35年7月13日	二百二十ヘクタールが冠水
36年8月5日	宅地五十三ヘクタール、耕地二千六百ヘクタール、二千三百戸が浸水。当時の冨月橋付近が破堤の危険のため、米俵四百三十九俵を投入して白根市を救う。死傷者三十六人 被害総額は約四億八千万円
41年7月17日	被害総額約一億円
42年8月28日	床上浸水百九十戸 農作物に被害多く約十億円の被害
44年8月12日	被害総額約三億円
45年7月17日	被害総額約一億円
53年6月26日	降雨量三百二十四ミリ（新記録）、戦後最大の洪水。千二百ヘクタールの耕地が冠水。四百四十戸が浸水。農業関係だけで十六億円の被害。

九月一日から防災週間

七月二十三日、長崎県を中心に降った雨は、一時間に百五十三ミリという史上二番目の降水量を記録し、大きな災害をもたらしたことは、記憶に新しいところですね。

さて、九月一日は防災の日。この日から一週間は防災週間です。もしも、長崎のような雨が降ったら、白根市は大丈夫なのかどうか、今月号の『クローズアップ』では、白根郷の水防を取り上げてみました。

少ない防災に対する関心

市長へのハガキが寄せられています。そのハガキを使ってアンケートを取ったところ、市から力を入れて欲しい施策の要望の中で、防災については長崎水害のあと、わずかに二件あっただけでした。（八月十日現在）

確かに白根市の場合、三十六年の八・五水害と、五十三年の六・二六水害が、最近の大きな水害としてあげられますが年を追うごとに減少し、